大阪教育大学紀要　第Ⅰ部門　第59巻　第１号　27～43頁（2010年９月）

A再構築と併合による構造構築

寺田　寛（てらだ　ひろし）

英語教育講座

（平成22年3月30日　受付）

近年の文法研究において，A移動の再構築現象についての有効な説明が行われている一方で，A移動の再構築の存在を疑問視する見方がある。この論文では，A再構築についての主要な先行研究を検討し，それらの問題点と解決の方向性を考察する。

キーワード：A移動，再構築現象，作用域，束縛条件

Ⅰ．はじめに

述語は，項（argument）に主題役割（thematic role）を与えるという性質を持つ。１つの項には１つの主題役割（以下，θ役割）が与えられねばならない。潜在的にθ役割が与えられうる位置（potential θ-position）をChomsky（1981）は，A位置（A-position）と呼んだ。A位置は，項がθ役割付与を受ける位置（形容詞句，名詞句，前置詞句，動詞句や軽動詞句の補部位置や指定部位置）だけでなく，時制を主要部とする最大投射TPの指定部（TP-Spec）の位置も含まれる。A位置への移動をA移動（A-movement）と呼び，A移動と言えば，実質上，軽動詞句の指定部位置（vP-Spec）やTP-Specの位置への移動への移動のことを指す。このようなA移動を受けた構成素を解釈する場合に，A移動を受ける前のもともと併合された位置で解釈されるかのような現象をA再構築現象と呼ぶ。

Ⅱ節以降では，A再構築現象についての先行研究を振り返る。Ⅱ節では，LF繰り下げ分析を概観する。Ⅲ節では，連鎖束縛分析を，Ⅳ節では移動のコピー理論分析を，Ⅴ節ではPF移動分析を，Ⅵ節ではA移動が再構築されないとする先行研究をまとめ，その問題点を指摘する。Ⅶ節では削除としての再構築ではなく，併合としての再構築の可能性を示唆する。

Ⅱ．LF繰り下げ分析：May（1977, 1985），Diesing（1992），Boeckx（2001）

A再構築現象は，May（1977）の研究によって知られるようになった。(1）のような繰り上げとコントロール文の対比は，A移動には作用域解釈に再構築現象が見られることを示している。

（1）a. Someone seems to John to be in the garden.（ambiguous）
b. Someone hopes to recite every poem.（unambiguous）
（Hornstein（1995: 156））

（1b）とは異なり，（1a）は，someoneとseemsとの間の作用域解釈が曖昧である。つまり，someoneがseemsより広い作用域を持つ場合がある。someoneに該当する人が存在しており，その人物が存在しているように思われるという解釈である。それ対して，someoneがseemsより狭い作用域を持つ解釈では，月のような人が住んでいないところで，someoneに該当する人物が存在しない場合でも，Johnが庭に誰かがいると考えてさえすれば，（1a）の文は真である。（1b）にはsomeoneがhopeよりも広い作用域を持つ読みしかない。すなわち，someoneに該当する人物が存在しない場合に（1b）は偽である。

従来，繰り上げ構文は，someoneが従属節である不定詞節の主語位置から主節の主語位置（これはA位置）へ移動する操作，すなわちA移動と呼ばれる操作によって派生され，論理形式で従属節S（=TP）の付加位置に繰り下げて解釈されることで曖昧さが生じると分析されてきた。つまり，（1a, b）は，それぞれ（2a, b）のようなLF構造を与えられる。

（2）a. [e] seems to John [someone$_1$ [to be t$_1$ in the garden]]
b. [someone]$_1$ [t$_1$ hoped [every poem]$_2$ [PRO to recite t$_2$]]

（2a）のsomeoneが狭い作用域を持つのは，従属節S（=TP）に付加された位置で解釈されるためである。

これに対して，（2b）のコントロール構造では（1a）のようなA移動が含まれず，someoneが主節でのみ解釈されるため，every句より広い作用域のみを与えられる。

このようなMay（1977, 1985）の数量詞繰り下げ（Quantifier Lowering（以下，QL））分析は，その後，Diesing（1992）やHornstein（1995）やFox（2000）などの研究に受け継がれる。

Diesing（1992）は，無冠詞複数形（bare plural）の名詞句の解釈に見られる曖昧さがA移動後の再構築によるものと主張した。次の2つの文を比べられたい。

（3）a. Firefighters are available.
b. Firefighters are altruistic.

（3a）の述語は一時的な状態を表すステージレベル述語（stage-level predicate）であり，この述語の特性として，（3a）は（4a, b）の2通りに曖昧である。

（4）a. 存在解釈（existential interpretation）：待機している消防士がいま消防署にいる。
b. 総称的解釈（generic interpretation）：消防士は呼んだらいつでも来てくれるものである。

一方，（3b）の述語は恒常的な状態を表す個体レベル述語（individual-level predicate）であり，この述語を含む（3b）の文は総称的解釈（すなわち，「消防士というものは命がけで救助をしてくれるものである」）だけが許され，存在解釈は得られない。

このような対比をDiesing（1992）は次のように説明している。無冠詞複数形名詞句などに代表される不定名詞句が，演算子に束縛されると，その演算子に応じて様々な解釈を与えられるというHeim（1982）の提案を取り入れた上で，（5）を導入している。

（5）a. VPの領域に含まれる要素は，存在数量詞に束縛される。
b. IPの領域に含まれる要素は，総称的数量詞に束縛される。
[$_{IP}$ 総称解釈 [$_{VP}$ 存在解釈]]

Diesingによれば，ステージレベル述語を選択するＩは，繰り上げ述語であるとされ，VP

内に生成された項がIP指定部の位置へLFでの繰り下げ操作(LF-lowering)を受ける。一方，個体レベル述語を選択するＩはコントロール述語であるとされ，VPの指定部には主節の主語によってコントロールされる空の代名詞主語PROが現れる。(3a）の繰り上げ構造と(3b）のコントロール構造の違いは，(1a）と（1b）の違いに還元されることになる。つまり，(3a）の不定名詞句firefightersはIP指定部に留まれば総称的解釈を受け，VP内部へ再構築されれば存在解釈を受ける。(3b）の不定名詞句は（2b）と同じ理由でVP内へ再構築されないため，IP指定部に留まり，総称的解釈のみを得ることになる。

(6) a. (i) [$_{IP}$ firefighters$_1$ [$_{VP}$ t$_1$ are available]]
(ii) [$_{IP}$ [$_{VP}$ firefighters$_1$ are available]]
b. [$_{IP}$ firefighters$_1$ [$_{VP}$ PRO$_1$ are altruistic]]

以上のような研究は，Boeckx（2001）の繰り下げによるA再構築理論の基盤になっていると考えられる。Boeckx（2001）は，A連鎖内で繰り下げを受けてよい数量詞はthere構文に現れることのできる弱い数量詞（weak quantifier）だけであると主張した。A連鎖の再構築は，LFで挿入される接辞である虚辞のthereがA連鎖の先頭位置に隠在的に挿入されることにより，弱い数量詞が繰り下げられるという分析を提案した。

すなわち，(7）の文は，LFでthereが挿入された後で（8）のような構造に結び付けられる。

(7) Someone from New York is likely to win the lottery.
(8) [there] is likely someone from New York to win the lottery.

このような主張を行う論拠として，繰り上げを受けた数量詞の繰り下げ読みが得られるか否かは，その数量詞がthere構文に現れうるか否かに結び付けることができるという事実を挙げている。

(9) a. Someone from New York is likely to win the lottery.
b. Nobody is believed to be in the reactor room.
c. Exactly one person is likely to get an offer.
d. *Every coin is likely to land heads.

(10) a. There is someone in the garden.
b. There is nobody in the garden.
c. There is exactly one person in the garden.
d. *There is everybody in the garden.

(9d）のような数量詞は強い数量詞（strong quantifier）であり，繰り下げられないものとみなし，(9a-c）のような不定名詞句やそれに類する弱い名詞句（weak NP）のみが繰り下げ可能な数量詞（lowerable quantifiers）であると主張している。

この点については異論があり，van de Koot（2004）によれば，強い数量詞が繰り下げ読みを持つことが可能である。

(11) a. Every Londoner is likely to receive a £10.- tax rebate.
(i) every Londoner > likely; (ii) likely > every Londoner
a′.*there is likely every Londoner to receive a £10.- tax rebate.
b. [Each of his$_1$ many problems]$_2$ seems to [every student]$_1$ t$_2$ to be caused by laziness.
b′.*There seems to every student each of his many problems to be caused by laziness. (van de Koot (2004: 169))

（11a）では, every句がlikelyよりも狭い作用域を持つ解釈が可能である。これについては, 全称数量詞の狭い作用域の解釈は広い作用域の解釈を含意（entail）するため，狭い作用域の解釈を表すための構造が必要でないと主張することで,（11a）の曖昧さを説明できるという反論がありうることを踏まえたうえで，van de Koot（2004）は,（11b）の例を挙げている。（11b）では，代名詞hisの変項束縛の解釈を得るためにeach句の繰り下げが必要となる。しかし,（11b）に対応するthere構文（11b′）が非文法的であることから, BoeckxのLF-there挿入分析はその論拠を失うことになる。

さらに，van de Koot（2004）が指摘するように，以下の２つの問題も残される。まず第一に，虚辞thereがLFで残るという分析は，LFで解釈を持たない要素が現れることを禁じるChomsky（1995）の完全解釈（Full Interpretation）の原理の違反を引き起こすという問題がある。第二に, LF接辞としてのthereがLFで不定名詞句に添加されるからといて, 不定名詞句が基底生成の位置へ再構築される必然性も明らかではない。むしろ，不定名詞句はthereの連結要素（associate）として，thereと結合するとされてきたこれまでの考え方にもそぐわない。

このような理由により，再構築がLFでのthere挿入によって引き起こされるというBoeckx（2001）の主張は支持されない。次節で見るように，繰り下げ操作を用いない分析方法が多くの理論で採用されている。

Ⅲ．連鎖束縛理論：Barss（1984, 1986）

Barss（1984, 1986）は，移動の再構築現象をconnectivity effect（接続性効果）と呼び, 移動の痕跡への再構築を仮定する分析の問題点を指摘した。移動の痕跡への再構築操作を仮定する代わりに，Barssは，連鎖束縛（chain-binding）という仕組みを提案した。連鎖束縛という概念は，次のようなものである。移動を受けた要素Yを先行詞Xが c 統御していない場合でも，XがYの痕跡t_Yを c 統御することによってXがYの内部にあるZを束縛することができる。

（12）… $[_Y$ … Z …] … X … t_Y …

このような概念はBarss（1986）で，連鎖接近可能性（Chain Accessibility）という考え方に定式化されるが，ここでは詳述しない。連鎖束縛（あるいは連鎖接近可能性）のしくみは，A移動にも非A移動にも適用されると考えられている。

このようなしくみを用いると次の（13）のような文の接続性効果を説明することができる。（13）ではhimselfがGeorgeを，herselfはSusanを先行詞とすることができる（Barss（1986: 129））。

（13）$George_1$ thinks that these pictures of $himself_1$/$herself_2$ annoy $Susan_2$.

この文でGeorgeがhimselfを束縛することができるのは，再構築効果というよりむしろ, 絵画名詞句内部のhimselfにとってGeorgeが局所的な先行詞とみなされるからである。一方，Susanがherselfを束縛することができるのは，連鎖束縛が働いているためであり，その説明を行う上でBarss（1986）はBelletti and Rizzi（1986）の心理述語の動詞句構造を採用している。Belletti and Rizzi（1986）は，主題項が経験者項よりも下位に生成される次のような動詞の構造を仮定している。

（14）$[_{IP}$ [these pictures of $herself_2]_3$ $[_{VP}$ $[_{V'}$ annoy $t_3]$ $Susan_2]]$

pictures of herselfが動詞句内部に痕跡 t_3 を残して従属節IPの主語位置へ移動し，この t_3

をSusanがｃ統御することにより，Susanがherselfを連鎖束縛する。これによって，herselfがSusanを先行詞とすることができる（cf. Barss（1986: 129））。

連鎖束縛の考え方は，再構築操作を用いないという点で優れたものであると言えるかもしれないが，同時に問題も抱えている。次の例を見られたい。

（15）a. John$_1$ seems to himself$_1$ [t to like cheese].

b. *It seems to him$_1$ that John$_1$ likes cheese. （Lebeaux（2009: 32））

（15a）でJohnがhimselfを局所的に束縛することはBarssの分析でも許される。問題は，（15a）でJohnの繰り上げによってできる痕跡ｔが従属節の主語位置に残されている点である。（15b）のように主節の経験者項が前置詞を無視して補文の内部をｃ統御することから，（15a）のhimselfがｔをｃ統御すると考えられる。ゆえに，（15a）でhimselfがJohnを連鎖束縛することになってしまう。連鎖束縛（あるいは連鎖接近可能性）による分析は，誤って束縛条件（C）の違反を引き起こす問題を抱えている。

Ⅳ．移動のコピー理論にもとづく再構築理論：Chomsky（1995），Hornstein（1995），Fox（2000），Lebeaux（1995）

Chomsky（1995: Chapter 3）は，移動のコピー理論を導入し，次のような非A移動の再構築効果を説明した。

（16）Which picture of John does he like t?

コピー理論とは，（16）のような例において，痕跡ｔの位置には，文字通りの痕跡ではなく，移動したwhich picture of Johnのコピーが残されるというものである。heがこのコピー位置のJohnをｃ統御するため，heがJohnを指示する解釈は束縛条件（C）の違反を引き起こすという説明がなされた。実際には，wh句の残すコピーはLF部門までに演算子の制限部と変項に変換されるが，ここでは詳述しない。

このようなコピー理論をA移動に利用した研究に，Hornstein（1995）がある。Hornsteinは，数量詞の解釈の際に使用されてきた数量詞繰り上げ（quantifier raising（以下，QR））を用いないで，格の照合にもとづくA移動により，数量詞の解釈を得ることができると主張した。QRが，数量詞がIPやVPに付加される操作であるのに対して，Hornstein（1995）の分析では，（17）の定義に見られるように，A移動によってできる痕跡が作用域の決定に利用される。

（17）A quantifier argument Q_1 takes scope over a quantified argument Q_2 iff Q_1 c-commands Q_2 (and Q_2 does not c-command Q_1). （Hornstein（1995: 154））

これを踏まえて，（18）の例文を見てみよう。

（18）Someone attended every seminar.

Hornsteinは，VPの上に分離したIPすなわち，[$_{AgrSP}$ [$_{TP}$ [$_{AgrOP}$ …]]]が投射される文の構造を仮定している。そのうえで，（18）は（19）のようなLF構造を持つとしている。

（19）[$_{AgrSP}$ someone [$_{TP}$ T [$_{AgrOP}$ every seminar [$_{VP}$ someone [attended every seminar]]]]]

主語someoneはVP内からAgrSP-Specへ，目的語のevery seminarはVP内からAgrOP-Specへ，それぞれA移動している。これらのA移動が残すコピーを削除する操作が適用され，（19）は（20a, b）のような出力をもち，これらがC-Iインターフェイスでの解釈を受ける。Hornstein は，Diesingの写像原理を利用し，every seminarのような強い数量詞が動詞句の外で解釈されると仮定する。

(20) a. [$_{AgrSP}$ someone [$_{TP}$ T [$_{AgrOP}$ every seminar [$_{VP}$ (someone) [attended (every seminar)]]]]]

b. [$_{AgrSP}$ (someone) [$_{TP}$ T [$_{AgrOP}$ every seminar [$_{VP}$ someone [attended (every seminar)]]]]]

(20a) では，someoneはその下位のコピーが削除され，AgrSP-Specからevery句をc統御しているため，(17) の作用域原理のもとでsomeoneがevery句よりも広い作用域を持つ。(20b) では，someoneのVP内のコピーが残され，every句にc統御されているため，every句がsomeoneよりも広い解釈を持つ。May (1977) が論じた (21a, b) (= (1a, b)) のような文の曖昧さについても同様に説明される。

(21) a. Someone seemed to attend every class. (some>, < every)

b. Someone hoped [PRO to recite every poem]. (someone >, *<every)

(Hornstein (1995: 156))

(21a) のsomeoneは，従属節内の動詞句内にコピーを残すため，AgrOP-Specへ移動するevery句のコピーにc統御される。一方，(21b) のsomeoneは主節の動詞句に挿入されるため，従属節内のevery句にc統御されることがない。こうして，(21a) ではevery句がsome句よりも広い解釈を持つことができるが，(21b) ではできないことが説明される。

Fox (2000) は，束縛条件 (C) と作用域再構築の相関関係は意味的にではなく統語的に決定され，束縛条件と作用域再構築はどちらもLFでのみ適用されると主張している。

まず，作用域再構築が得られる証拠として，次の例文を挙げている。

(22) a. Someone from NY is very likely t to win the lottery.

b. [At least one soldier] seems (to Napoleon) t to be likely to die in every battle.

c. ??[Someone from his$_1$ class]$_2$ shouted to every professor$_1$ [PRO$_1$ to be careful].

d. [Someone from his$_1$ class]$_2$ seems to every professor$_1$ [t$_2$ to be a genius].

(Fox (2000: 145, 147))

(22a, b) は (21a) に類似の例である。(22a) は，someone from NYがlikelyよりも広い解釈と狭い解釈のどちらを与えられてもよく，曖昧である。A移動が作用域の曖昧さを生み出すということは，A移動のもとの位置でも作用域が決定されているということを意味しており，Foxは作用域再構築が起こっている証拠になると主張している。(22b) においては，at least one soldierがevery battleよりも広い解釈と狭い解釈で曖昧であり，every句が主節へQRを受ける可能性はないため，at least one soldierが従属節内部へ作用域再構築されると考えられる。(22c) と (22d) を比べると，(22c) ではsomeone from his classは，PROの位置で解釈され得ないため，hisがevery句に束縛される変項として解釈されるためには，every句がhisをc統御する非A位置へQRを受ける必要がある。これは，(23a) のような構造を生むことになるが，(23a) は，(23b) の例に見られるのと同様の，いわゆる弱交差の効果を生み出す。

(23) a. [every professor$_1$] [someone from his$_1$ class]$_2$ shouted to [every professor$_1$] [PRO$_1$ to be careful].

b. *His$_1$ mother loves everyone$_1$.

一方，(22d) では弱交差違反は生じない。これはsomeone from his classがt$_2$の位置で解釈されることによりevery句がhisを束縛しているためである。作用域再構築が適用されていることを支持している。

このような作用域再構築は，Foxによれば，QLあるいは，移動のコピー理論により得

られるとされ，数量詞句が再構築位置に位置するようなLFが作用域再構築に関わるとしている。以下に見る（26）の仮定を導入していることから，Foxは，コピー理論を用いた再構築を唱える立場に属するとしておく。

次に，（24a, b）のような作用域再構築と束縛条件（C）の相関関係から，Fox は再構築がLFにおける統語的操作であると仮定している。これは，束縛条件（C）がLF構造に敏感であり，再構築操作によって束縛条件（C）の違反が生じるためである。

(24) a. [A student of David's$_1$] seems to him$_1$ t to be at the party.
（∃>seem）*（seem>∃）
b. [A student of his$_1$] seems to David$_1$ t to be at the party.
（∃>seem）（seem>∃） （ibid.: 170）

（24a）では，存在数量詞句がseemより狭い解釈を得るべく，tの位置へ再構築されると，himがDavidを束縛し，束縛条件（C）の違反を引き起こす，つまり，束縛条件（C）の適用を促進（feed）している。（24b）では，再構築が行われ，hisがDavidに束縛されても束縛条件の違反は生じないため，存在数量詞がseemより狭い作用域を持つ解釈が許される。

このような作用域再構築を支持する証拠がある一方で，A移動と非A移動の間には，非対称性がある。

(25) a. Every argument that John$_1$ is a genius seems to him$_1$ to be flawless.
b. ??/*Which argument that John$_1$ is a genius did he$_1$ believe t? （ibid.: 195）

A移動は束縛条件（C）の適用を奪取（bleed）しており，（25a）は文法的である。それに対して，非A移動の例である（25b）は，束縛条件（C）の違反を免れない。

この（25a, b）の違いを導くために，Fox（2000: 195）は，（26a, b）を仮定した。

(26) a. A-movement (optionally) leaves a simple trace.
b. A′-movement obligatorily leaves a copy that is converted to an operator-variable construction in accordance with economy considerations.

A移動が残すのはコピーである必要はなく，痕跡であってよいため，束縛条件（C）の効果が生じない。非A移動は義務的にコピーを残さねばならず，そのコピーは演算子・変項構造に変換されるが，束縛条件（C）違反を引き起こす。

Hornstein（1995）やFox（2000）の分析には問題があり，次のような例文がなぜ非文法的なのかを説明することができない。

(27) *He$_1$ seems to John$_1$'s mother t$_1$ to be expected t$_1$ to win.
（有元・村杉（2005: 40））

束縛条件はLFでのみ適用されるという仮定の下では，（27）のheが t$_1$ の位置へ再構築されれば，Johnに局所的に束縛されず，束縛条件（B）の違反を引き起こさない。A再構築は数量詞句だけに限定されるという仮定を追加すればこの問題を解決できると考える読者がいるかもしれないが，次の例では，数量詞句ではない主語の再構築が可能であることを示している。

(28) [His$_1$ father]$_2$ seems to every boy$_1$ [t$_2$ to be a genius]. （Fox（2000: 147））

仮に，（27）で非文法性が生じるのは，heが再構築される前にJohnが束縛条件（C）の違反を引き起こすためであるとすると，束縛条件（C）はLFとそれ以外の派生のどのレベルでも破られてはならないということを述べているのと等しい。これでは，たとえば，（24a）で∃>seemの読みが得られる場合でも派生の途中で束縛条件（C）が破られてしまうことになる。

次に，Lebeaux（1995）の分析に移ろう。Lebeauxは，A移動に再構築があると仮定する立場を採用している。A再構築と束縛原理が適用されるタイミングを組み合わせて，再構築に関わる事実を説明しようとしている。

束縛条件はその種類によって適用される時期が異なるとされる。照応形が最小の領域で束縛されることを要求する束縛条件（A）はどこかで満たされれば良く，照応形が派生のいかなる時点で束縛されてもよい。それに対して，代名詞や指示表現が（ある領域の中で）束縛されることを禁じる束縛条件（B）と（C）は，everywhere condition（「全域条件」（あるいは「毎次（適用）条件」）と呼ぶことにする）とされ，派生のあらゆるところで適用され，破られてはならない。

次の例を見られたい。（29a）は（29b, c）の2通りの解釈で曖昧である。

(29) a. Two women seem t to be expected t to dance with every senator.
b. 2x∀y（there are two women who dance with every senator）
c. ∀y2x（every senator has two women who dance with them—not necessarily the same two women） （Lebeaux（1995: 64））

（29b）の読みでは，two womenがevery senatorよりも広い作用域の解釈を持ち，（29c）ではevery句がtwo句よりも広い作用域の解釈を持つ。

それに対して，（30a）は（30b）の解釈が可能であるが，（30c）の解釈はない。これを捕集効果（trapping effect）とLebeaux（1995）は呼んだ。

(30) a. Two women seem to each other t to be expected t to dance with every senator.
b. 2x∀y
c. *∀y2x （ibid.）

この対比は，Lebeauの分析でもA移動の繰り下げを用いて説明される。（29a）の繰り下げ後のLF構造は（31）のようになるとされている。

(31) e seem e to be expected two women to dance with every senator.

Two womenが最下位の節の主語位置に繰り下げられることで，every句よりも狭い作用域を与えられるという。両方の数量詞が同一の節内にあることでどちらが広い作用域を持つこともできるためである。

これに対して，（30a）が（30c）の読みを持つためには，（32）のような推定上のLF構造が生み出されねばならない。

(32) e seem to each other e to be expected two women to dance with every senator.

ここでも，最下位の節の主語位置にtwo句が繰り下げられている。このようなQLが行われると，照応形each otherがtwo句に束縛されなくなり，束縛条件（A）が破られるとして，（30c）の読みが得られないことを説明しようとしている。このことは，束縛条件（A）の充足と数量詞作用域解釈が同じ表示でなされねばならないということを意味していると分析している。照応形束縛と数量詞作用域との単一の首尾一貫した表示（one coherent representation）がなければならないとした（p. 65）。

すぐ上で，照応形が派生のいずれかの時点で束縛されていれば認可されると仮定されていることを見た。しかし，この仮定では（32）のLF構造を排除することができないはずである。しかし，今見た首尾一貫性が見られる場合には，照応形はLFで束縛されねばならないとされている。首尾一貫性が求められないときには，照応形の束縛は随時に適用されてよいが，首尾一貫性が求められるときには照応形がLFで束縛されねばならないとい

う仮定がなされている。このような仮定は，照応形束縛の時期についての複雑化を招くように思われる。

Lebeaux（1995）の分析はLebeaux（2009）でさらに精緻化され，Lebeaux（2009）では束縛条件（A）がLFで適用されると修正されている。Lebeaux（2009）の分析の問題点については，寺田（2010）を参照されたい。

Hornstein（1995），Fox（2000），及び，Lebeaux（1995）のコピー理論にもとづくA再構築分析にはいずれも問題が残されていることを概観した。次節では，コピー理論にもとづかない分析として，再構築効果のPF移動分析に目を向ける。

Ⅴ．PF移動分析：Sauerland and Elbourne（2002）

PFでの移動を用いる分析として，Sauerland and Elbourne（2002）（以下，S&E）が知られている。はじめに，次の（33a, b）について考えてみる。

(33)a. An Austrian is likely to win the gold medal.

(i) an Austrian > likely (ii) an Austrian < likley

b. [Which article about himself$_2$]$_1$ did Mary ask every student$_2$ to read t$_1$?

S&Eは，（33a）のように，繰り上げ主語が繰り上げ述語likelyよりも広い作用域と狭い作用域の読みとで曖昧であるという事実を全体再構築（total reconstruction）と呼び，（33b）のような部分再構築（partial reconstruction）と区別した。これは，非A移動では，移動したWh句のうちの一部分である，制限部（restriction）だけが再構築されるのに対して，（33a）のようなA移動では移動した主語[an Austrian]全体がlikelyより下位のコピー位置へ再構築されるためである。

このような全体再構築の効果は，QLやコピー削除によって行われるというMay（1977）以来の考え方に対して，Aoun and Benmamoun（1998）（以下，A&B）は，全体再構築の効果はA移動が顕在的に移動していないことによってもたらされると論じた。すなわち，A移動はPFで適用されることが許され，その場合には，繰り上げを受けた構成素は表面的には移動しているように見えながらも，実際は基底生成位置に留まり，その場で意味解釈を受ける。これにより，あたかも全体再構築が起こっているような現象が見られるという。

S&Eは，全体再構築がPF移動によってしか得られないという趣旨のA&Bよりもさらに強い主張を行った。すなわち，発音される位置よりも下位の位置で意味解釈を受ける唯一の方法は，その構成素をPFで移動させることであるという。そして，発音される位置で意味解釈がなされるという結果を生み出す（つまり，PFとLFの両方に影響を及ぼす）移動を幹移動（stem movement）と呼び，PF移動と区別している。

すなわち，（33a）で（i）の読み（an Austrian > likely）が与えられる場合は（34）に表されるように幹移動によって，（33a）で（ii）の読み（an Austrian < likely）が与えられる場合は（35）に表されるようにPF移動によって構造が派生されているという。

(34)幹移動

PF: [an Austrian] is likely [~~an Austrian~~] to win the gold medal.

LF: [an Austrian] is likely [~~an Austrian~~] to win the gold medal.

(an Austrian > likely)

(35) PF移動

PF: [an Austrian] is likely [~~an Austrian~~] to win the gold medal.

LF: is likely [an Austrian] to win the gold medal. (an Austrian < likely)

この分析の問題点として，次のような例が挙げられる（cf. van de Koot (2004)，Marušič (2009)）。

(36) a. John seems to Fred [to appear to himself [to like Mary]].
(Chomsky (2001: fn. 56))

b. *He$_1$ seems to John's$_1$ mother [t$_1$ to be expected [t$_1$ to win]].
(Lebeaxu (2009: 23))

c. [His$_1$ mother's]$_2$ bread seems to every man$_1$ t to be known by her$_2$ t to be the best there is.

d. ?*[His$_1$ mother's]$_2$ bread seems to her$_2$ t to be known by every man$_1$ t to be the best there is. (Lebeaux (2009: 47))

(36a) の例で，himselfはFredではなくJohnに束縛されねばらない。JohnはPF移動によらずに幹移動でto appearの主語位置にコピーを残さねばならないはずである。この例文は再構築効果が見られるにも関わらず，PF移動ではこの効果を捉えられないことを示していると考えられる。(36b) でも，heの移動が幹移動ではなく，PF移動であったとすると，heはJohnをLFでc統御しないため，束縛条件（C）の違反が生じないことになってしまう。このことは，束縛条件（C）を満たすという目的がある場合でも，PF移動は許されてはならず，必ず幹移動で表層の主語位置へ義務的にA移動が適用されねばならないことを意味している。(36a, b) から，A移動は必ず幹移動であったとしよう。PF移動による再構築効果の説明が成り立たなくなる。S&EではLFでの再構築はないとされ，全体再構築はPF移動によってもたらされるとされていることを想起されたい。ここで，(36c, d) を見られたい。(36c) のhisはevery句に束縛される変項としての解釈を持つが，主語名詞句は幹移動によってしか主節の主語位置へ移動されないはずで，(36d) と同様に (36c) でも，hisが弱交差の違反を生じると予測されてしまう。[1)]

より最近のPF移動分析の取り組みにはMarušič (2009) ほかがあるが，その分析については稿を改めて吟味する。次節では，A再構築そのものの存在を疑問視する先行研究を紹介し，その主張の妥当性を検討する。

Ⅵ. A再構築否定説：Chomsky (1995)，Lasnik (1998, 1999)

Chomsky (1995: 327) は，A移動に再構築が適用されないとし，以下の例をその証拠として挙げている。

(37) *John$_1$ expected [him$_1$ to seem to me [t to be intelligent]].

(37) は，束縛条件（B）に抵触しているため，非文法的である。himは最下位の非定形節からA移動を受けて，Johnをその局所領域内に持つため，Johnに束縛されると束縛条件（B）に違反することになる。もしこのhimがA連鎖のtの位置へ再構築されると，(38) のような構造を持つことになる。

(38) John$_1$ expected [to seem to me [him$_1$ to be intelligent]]

(38) に束縛条件（B）が適用されると，himではなくmeがJohnの局所的束縛子になり，束縛条件（B）が誤って許されてしまうというのがA再構築を退ける論拠とされている。

このような主張に異を唱え，Terada（2006）は，himがA再構築を受けたとしても，その束縛領域は主節であることに変わりはないと主張した。次の例を見られたい。

(39) a. $Bill_1$ expected [$himself_1$ to seem to me [t to have hit $himself_1$]]
(i.e. $Bill_1$ expected me to think that he_1 had hit $himself_1$.)
b. *$Bill_1$ expected [him_1 to seem to me [t to have hit $himself_1$]]
(i.e. $Bill_1$ expected me to think that he_1 had hit $himself_1$.)（Terada（2006: 11））

Chomsky（1995）の主張するとおりに，束縛条件（A）がLFでのみ適用される条件であるとすると，次のような理由で，（37）はA再構築を退ける証拠にならない。（39a）における上位のhimselfは主節を束縛領域としているはずである。さもなければ，Billに局所的に束縛されず，束縛条件（A）に違反してしまう。A再構築が存在しないというChomskyの主張が正しければ，上位のhimselfがｔへ再構築されないことになり，下位のhimselfが上位のhimselfによって局所的に束縛されず，束縛条件（A）が破られてしまうはずである。下位のhimselfが束縛条件（A）を満たすためには，上位のhimselfがｔへA再構築されねばならない。しかし，上位のhimselfが束縛条件（A）を満たすためには，ｔへのA再構築が起こってはならないはずである。この二律背反とも思える問題を解決するためには，上位のhimselfがｔへ再構築される場合にもその束縛領域が主節であると仮定する必要がある（下位のhimselfの束縛領域が主節であるかないかについては，ここでは脇へやっておく）。そして，（39a）の上位の照応形himselfとそれに対応する（39b）の代名詞類himが相補分布していることから，両者の束縛領域が同一であると考えるのが自然である。ゆえに，Chomskyの理論とは異なり，（37）のhimがｔへ再構築される場合にもその束縛領域は主節であることになる。このことは，（37）がA再構築が存在しないことを示す証拠にはならないということを示している。

このようなA再構築がないとするそのほかの立場は数多くあり，その代表的な研究として頻繁に引用されるLasnik（1998, 1999）を次に検討したい。Lasnik（1998, 1999）は，Zubizarreta（1982）が最初にMay（1977）のQL分析の問題点を指摘した次の対比に言及している。Zubizarretaの主張は，Noam Chomskyの次のような観察に基づいている。

(40) a. Everyone will not come.
b. Everyone is likely not to come.（Zubizarreta（1982: 58））

（40a）はevery句とnotとの作用域が曖昧であるのに対して，（40b）は曖昧でなく，every句がnotよりも広い作用域を持つ解釈しか得られない。すなわち，（40a）に許される部分否定の解釈が（40b）には得られない。同様に，Lasnik（1998）によれば，（41a）は（41b）のような言い換えを行うことはできず，（42a）も（42b）のような言い換えを行うことができないという。

(41) a. No large Mersenne number was proven to be prime.
b. It was proven that no large Mersenne number is prime.

(42) a. No one is certain to solve the problem.
b. It is certain that no one will solve the problem.

例えば，（42a）の問題解決の困難さは少なくとも並み程度であり，問題解決者が博識でないことによるものであるというような状況を表しているのに対して，（42b）は問題が解決不可能であるか，どうしようもなく不適切な問題解決者を選択してしまったというような状況を表しているため，（42b）は（42a）の言い換えにはならないという。

このような否定の作用域の決定は，vP内の主語コピー位置で解釈が可能であることを

示しているように見える。すなわち，（40a）では，everyoneはVP内のコピーが否定辞にｃ統御されることで否定が広い作用域を持つ解釈（not>every）の読みが得られると考えられるかもしれない。しかし，これでは（40b）でもevery句の下位のコピーが解釈されるはずであり，notよりも狭い作用域を持つ解釈が可能になると予測されてしまう。このような問題を解決するために，ここでは，Saito（2006）やMiyagawa（2009）に従い，TP-Specにある主語はNegの作用域内にあると仮定しておくことにする。（40a）では，every句が再構築されなくても否定の作用域に含まれる。（40b）に部分否定の読みがないことから，否定の作用域は表層の位置で解釈されると考えられる。ゆえに，A再構築が可能であったとしても，すでに否定の作用域は表層の位置で解釈されているため，A再構築後には否定の解釈が変更できないということである。（41）-（42）にも同様の説明が可能であろう。

A移動の再構築効果に対して，Lasnik（1998, 1999）は繰り上げ述語に修飾語が付く場合に次のような作用域の対比が見られることを観察している。[2)]

（43）Every coin is 3% likely to land heads. （Lasnik（1999: 205））

不正を行わずに5枚の硬貨をはじくような状況下で（43）のように言う場合，再構築の読み（3% likely>every）が好まれるような先入観があるにも関わらず，（44）のように言い換えることができないという。

（44）it is 3% likely that every coin will land heads. （ibid.）

（44）は再構築される場合に得られるとすると可能になるはずの言い換えである。むしろ，（43）にとって唯一可能な読みは再構築がなされない読み，すなわち，各々の硬貨が裏よりも表が着地しやすいように重くしてあるという，考えにくい状況を表すよみであるという。このことから，Lasnikは繰り上げを受けた主語は再構築されないという結論を導いている。

しかし，Wurmbrand and Bobaljik（1999）及び，Marušič（2009）によれば，３％のような修飾語句を伴う繰り上げ述語は，これを伴わない繰り上げ述語と同様のふるまいをすることがLasnik（1998, 1999）の説明ほどには明白ではないとされている。不定名詞句を繰り上げ主語として含む場合に，修飾語句付きの繰り上げ述語と修飾語句のつかない繰り上げ述語が異なる解釈を持つことは注目に値する。（45）-（46）は，Wurmbrand and Bobaljik（1999: 13）からの引用である。

（45）One coin is 38% likely to land heads.

a. One of the coins is weirdly weighted in favor of tails.

b. ?#It is 38% likely that only one coin will turn up heads.

（46）One coin is likely to land heads.

b. ✓It is likely that only one coin will turn up heads.

（45）のように，修飾語句のついた繰り上げ述語は，硬貨が3枚あるときに，不定名詞句の繰り下げられた読み（45b）を必ずしも持たないが，硬貨が2枚しかない場合には（46）は（46b）のような再構築された解釈を持つという（cf. Marušič（2009: 185））。このことから，38％のような修飾語句が作用域再構築を阻止していると考えられるように思われる。

但し，3％の代わりに，veryやmoreのような修飾語がつく場合には，繰り上げ主語の作用域再構築が許されることが，van de Koot（2004）によって報告されている。

（47）a. Some young lady is more likely t to dance with every senator than some octogenarian. ∃>, <∀

b. Some young lady is very likely t to dance with every senator.
∃>, <likely/∀ (van de Koot (2004: 171))

このことから，3% likelyは，修飾語の付かないlikelyやmore likely/very likelyとは異なるふるまいをすることが分かる。ゆえに，Lasnik（1998, 1999）のように，繰り上げを受けた主語は再構築されないと結論付けるのは困難である。むしろ，3% likelyという述部がA再構築を阻止すると結論付けるべきであろう。

A再構築の効果がないことを示す論拠とされてきたChomsky（1995）やLasnik（1998, 1999）の例文は，それ自体，説得力に欠けるものであると言わざるを得ない。ゆえに，この論文ではA再構築効果そのものはあると結論付けることにする。しかし，A再構築効果が見られるからと言って，ひとたび繰り上がった要素をもとの位置へ繰り下げたり，ひとたび移動先に作られたコピーをあとから削除してあたかもコピーが以前に作られていなかったかのような操作を仮定するここまで見た先行分析は，説明できない不自然な仮定に頼っていると言わざるを得ない。そこで，代案として，次節ではこのようなコピーされたり，移動された構成素を移動先で取り消したり，空範疇に置き換えたりする操作を含まない代案を示唆する。この代案では，構造を構築する操作そのものが再構築後の構造を直接構築する操作であると論じる。

Ⅶ. 結論：併合としての再構築

Ⅱ-Ⅵ節では，さまざまなA再構築に関わる分析を概観してきた。A再構築効果そのものを否定するChomsky（1995）やLasnik（1998, 1999）の論拠は説得力に欠けるものであると結論付けた。また，A再構築効果を認める先行分析でも，個々の分析に問題があるというだけでなく，ひとたび移動した構成素を移動先で取り消すという削除としての再構築操作が規定されていることを見た。痕跡という包括性条件に違反する要素を計算の途中で導入するBarss（1984, 1986）の連鎖束縛やFox（2000）の分析にも問題があることを述べた。

この節では，そのような問題を解決するために，併合にもとづく再構築理論を代案として示唆する。これによれば，再構築操作はコピーされた構成素（の一部分）を表層の位置で削除するという「削除としての再構築」ではなく，最初から削除することになる要素を統語的構築物に導入せず，必要に応じて併合する構造構築の操作の一部である。この意味で，コピー理論に依らない移動理論であり，「併合としての再構築」を行う。計算体系に導入される語彙項目を構成している素性（の一部分）は，音声解釈であれ，意味解釈であれ，その素性が解釈される位置に併合されると考えられる。

語彙項目は，典型的な場合，音声素性（PFs）と意味素性（SFs）と形式素性（FFs）から成り，三者が必ずしもひとまとまりを形成しておく必要はない。PFsだけが発音位置に併合され，それ以外の素性は文の離れた位置に併合されることが許されてよいはずである。数量詞の数量詞素性は，意味素性の一種であるとすると，それだけが単独で演算子位置に併合され，PFsは主題役割が付与される位置にθ素性（これはFFsとみなしておく）とともに併合されていることも許されるということである。素性が別々の位置にあっても，我々人間がそれらをつなぎ合わせて一つの言語表現として解釈できるのはPFsがあるからであり，PFsをもとにしてそれらから連想されるSFsやFFsの存在を検知できるが，実際にSFsやFFsが解釈される位置は文のほかのところにある。あるいは，主要部が持つ選択素性や形式素性からSFsやFFsが予見され，それらに適合するPFsを持つ語彙項目を構造

に導入するという可能性もある。PFsとSFsとFFsとの間に結びつきがあることにより，統語構造の別々の場所に併合されても支障をきたさない。

まずはPFsが表層の位置に挿入され，そのPFsに結び付いたSFsがPFsとともに単一の位置に併合される。それらに結び付く形式素性には，人称，数，性などのϕ素性や解釈不可能な格素性（uCase）やθ素性（uθ），そのほかの選択素性がある。PFsが併合される位置でこれらのFFsのいくつかの解釈不可能素性が照合を受けて満たされる。ここで必要とされない残りのFFsはそれらが必要とされる文中のほかの位置に挿入される。PFsやSFsやFFsのいくつか（たとえば，uCase）は表層の位置，つまり，発音される位置で挿入される。θ素性は動詞の投射内に挿入される。

A再構築効果を説明するためには，必要に応じて意味素性が表層位置とは異なる位置に併合される必要がある。May（1977, 1985）の作用域再構築の例では，数量詞のSFsが表層の位置に併合される場合には広い作用域が得られ，いわゆる痕跡の位置に併合されれば狭い作用域の解釈が得られる。否定辞や3%のような要素がある数量詞のPFsとSFsの間に介在すると，両者の結びつきが断ち切られてしまうため，PFsとSFsとは離れることができず，数量詞の解釈は否定辞や3%の作用域の外で行われることになると考えなければならないであろう。照応形や束縛変項としての代名詞や指示表現などの要素はSFsに含まれる要素であるとすれば，束縛条件や交差の条件を満たす位置に併合される。

多くの疑問や問題点が残されているが，このような「併合による再構築」という考え方がA再構築現象への新たな接近法になる可能性は否定できないであろう。より具体的な分析については，稿を改めて論じる。[3)]

謝辞

この研究は，平成21年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号21520508）研究課題「統語論におけるコピー理論へのトップダウン式接近法に関する研究」の一部である。

注

[1)] 但し，S&EはAgreeではなくLFでの素性移動によって素性照合が行われると分析しているので，（36b）のheの形式素性がLFで主節のTへ牽引されることにより，Johnを束縛すると仮定すれば（36b）の文を束縛条件（C）の違反として排除できるという反論が成り立つかもしれない。（36a）でもJohnの形式素性が主節へ牽引される前に，appearが現れる節のTを経由することにより，himselfを局所的に束縛すると考えられるかもしれない。しかし，形式素性の移動によって新たな束縛関係を生み出すという仮定の下では，（36c, d）でも，たとえPF移動によって痕跡位置に[his$_1$ mother's bread]が留まっていたとしても，[his$_1$ mother's bread]全体の形式素性が主節のTへ牽引されることで，新たな束縛関係を生み出してしまうはずであり，（36c）ではhisの形式素性がevery句に束縛されずに弱交差の違反が生じることになってしまう。あるいは，（36d）では束縛条件（C）の違反が緩和されてしまう可能性がある。

[2)] 次の例文を参照されたい。

（i）Every coin is likely to land heads. ∀＞likely, likely＜∀ （Lasnik（1998: 93））

この例文では，全称数量詞が繰り上げ主語として現れており，繰り上げ述語likelyとの作用域に関して，２つの作用域の読みは区別不可能とされている。つまり，全称数量詞がlikelyより広い作用域を持つ解釈と，全称数量詞がlikelyより狭い作用域を持つ解釈は区別することができないという。それに対して，繰り上げ述語であるlikelyに3%という修飾語を補った（43）のような文では，2つの作用域の解釈は区別可能となり，再構築されない解釈つまり，全称数量詞が3% likelyよりも広い作用域を持つ解釈のみが得られる（cf. Marušič（2009））。

[3]「併合としての再構築」に至る予備的な研究として，寺田（2008, 2009, 2010）のトップダウン式再構築理論を参照されたい。

参照文献

Aoun, Joseph and Elabbas Benmamoun（1998）“Minimality, Reconstruction, and PF Movement,” *Linguistic Inquiry* 29, 569-597.

有元将剛・村杉恵子（2005）『束縛と削除』，研究社，東京.

Barss, Andrew（1984）“Chain Binding,” manuscript, MIT.

Barss, Andrew（1986）Chains and Anaphoric Dependence, Doctoral dissertation, MIT.

Belletti, Adriana and Luigi Rizzi（1988）"Psych-Vers and θ-Theory," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 291-352.

Boeckx, Cedric（2001）“Scope Reconstruction and A-Movement,” *Natural Language and Linguistic Theory* 19, 503-548.

Chomsky, Noam（1981）*Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.

Chomsky, Noam（1995）*The Minimalist Program*, The MIT Press, Cambridge, Mass.

Diesing, Molly（1992）*Indefinites*, The MIT Press, Cambridge, Mass.

Fox, Danny（2000）*Economy and Semantic Interpretation*, The MIT Press, Cambridge, Mass.

Heim, Irene（1982）*The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*, Doctoral Dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Hornstein, Norbert（1995）*Logical Form: from GB to Minimalism*, Blackwell, Oxford.

Lasnik, Howard（1998）“Some Reconstruction Riddles,” *UPenn Working Papers in Linguistics* 5, 83-98. [reproduced in Lasnik, Howard（2003）*Minimalist Investigations in Linguistic Theory*, Routledge, New York.]

Lasnik, Howard（1999）“Chains of Arguments,” *Working Minimalism*, ed. by Samuel Epstein and Norbert Hornstein, 189-215, The MIT Press, Cambridge, Mass. [reproduced in Lasnik, Howard（2003）*Minimalist Investigations in Linguistic Theory*, Routledge, New York.]

Lebeaux, David（1995）“Where Does the Binding Theory Apply?,” *University of Maryland Working Papers in Linguistics* 3, 63-88.

Lebeaux, David（2009）*Where Does Binding Theory Apply?*, The MIT Press, Cambridge, Mass.

Marušič, Franc（2009）“If Non-simultaneous Spell-Out Exists, This Is What It Can Explain,” *Merging Features: Computation, Interpretation and Acquisition*, ed. by José

M. Brucat, Anna Gavarró, and Jaume Solà, 175-193, Oxford University Press, Oxford.
May, Robert (1977) *The Grammar of Quantification*, Doctoral dissertation, MIT.
May, Robert (1985) *Logical Form*, The MIT Press, Cambridge, Mass.
Miyagawa, Shigeru (2009) *Why Agree? Why Move?*, The MIT Press, Cambridge, Mass.
Saito, Mamoru (2006) "Optional A-Scrambling," *Japanese/Korean Linguistics* 16, 44-63, CSLI Publications, Stanford, Calif.
Sauerland, Uli and Paul Elbourne (2002) "Total Reconstruction, PF Movement, and Derivational Order," *Linguistic Inquiry* 33, 283-319.
Terada (2006) "On the Minimal Application of the Binding Theory," *Memoirs of Osaka Kyoiku University*, Ser. I, 54.2, 1-15.
寺田 寛 (2008)『言語における論理形式のトップダウン式再構築に関する研究』, 平成17年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書（課題番号：17520325), 大阪教育大学.
寺田　寛 (2009)「トップダウン派生によるスクランブリングと再構築」,『大阪教育大学英文学会誌』第54号, 31-49, 大阪教育大学英文学会.
寺田　寛 (2010)「A移動とA再構築の非対称性について」,『大阪教育大学英文学会誌』第55号, 25-41, 大阪教育大学英文学会.
Van de Koot, Hans (2004) "Explaining Barss's Generalization," *UCL Working Papers in Linguistics* 16, 165-195.
Wurmbrand, Susi and Jonathan Bobaljik (1999) "Modals, Raising and A-Reconstruction," http://web.mit.edu/susi/www/research/papers.html
Zubizarreta, Maria Luisa (1982) *On the Relationship between the Lexicon and Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.

A-Reconstruction and Merger-Based Structure Building

TERADA Hiroshi

Department of English Education
Osaka Kyoiku University, Kashiwara, Osaka 582-8582, Japan

Reconstruction has been a topic of interest in the theory of grammar. Movement creates not only phonological effects, but also semantic effects, such as scope and binding possibilities. The term reconstruction is used to describe cases where movement does not bring about such semantic effects. Theories of generative grammar have attempted to yield reconstruction effects on A-movement by assuming quantifier lowering (May (1977, 1985), Diesing (1992), Boeckx (2001) among others), chain binding (Barss (1984, 1986)), deletion of higher copies (Chomsky (1995:Chapter 3), Fox (2000), Lebeaux (1995, 2009) among others), or PF-movement (Aoun and Benmamoun (1998), Sauerland and Elbourne (2002) among others). On the other hand, Chomsky (1995) and Lasnik (1998, 1999) among others argue that there is no reconstruction with A-movement. These analyses are not free from their empirical or theoretical problems and therefore are still under debate.

In this paper, I suggest an altnerative approach to this issue, i.e. a Merger-based approach to reconstruction and structure-building. A lexical item is made up of phonological, semantic and formal features. This approach allows an insertion of phonological features and other features in separate positions, therefore yielding A-movement reconstruction effects without any undoing operations such as quantifier-lowering or deletion of higher copies (see Terada (2008, 2009, 2010), for preliminary studies on reconstruction). If our alternative is on the right track, a Merger-based approach to structure building is supported by evidence from reconstruction effects, although we will leave further elaboration of this approach to future research.

Key Words: A-movement, reconstruction phenomenon, scope, binding condition